

エマスの反抗精神

尾 形 敏 彦

I 自 己 信 頼

本稿の中心課題は奴隷問題と南北戦争に対するエマスの態度である。彼の反抗精神の出発点は自己信頼にあり、本稿前半（I，II，III，IV）においては自己信頼の人としてのエマスの全体像を略述し、その反抗精神の萌芽を見た。

1817年秋、14才のエマスはハーヴァードに入学し、一家は The Boston Female Asylum の隣の No. 60, Essex Street に新居を見つけて移転した。母ルース（Ruth）は4人家族の一家を週17ドルで下宿させて生活費にあてた。エマスは貧しくても家計の心配をすることなくハーヴァードに入学した。ハーヴァードは信教上のことも、制服に至るまでも厳格な罰則が存在したが、エマスは忠実にそれらに従った。彼の生活は奨学金では不足で、家庭教師をしたり、新入生の時には総長カーランド（Kirkland）のメッセンジャー・ボーイをしたり、寮の食堂の給仕をして寮費の4分の3の減免を受けて4年間を送った。彼は誰とも親しくならず、彼自身の回想によってもラテン・スクール（the Latin School）時代も孤独であったが、ハーヴァード時代はさらに孤独であったという。彼はボストンで母と1、2日を過ごすのが楽しみであった。無口で年少の弱々しい少年は級友の目には認められなかった。エマスは級友の大騒ぎには加わらなかったが、愉快的遊びには努めて加わった。学校はラテン・スクールより自由に乏しく、教師は単に訓練師（drillmaster）であった。学業面では平凡であり、教学の成績が悪く、哲学もよくなかった。しかし、彼の小学校がラテン・スクールだったので、ラテン語は得意であった。日記をつけることを覚えて、その習慣は生涯続いた。それは自分の感想にとどまらず、

読書中感激したところを抜き書きもした。これらが後の作品の材料になった。大学教育に関しては生涯批判的、軽蔑的であった。彼は勉学に興味がなく、窓外の自然の景色を眺めていた。

エマスンが2年生になるとクラスは反抗的になって厳格な大学当局と衝突して事件を起した。しかし、エマスンは家に帰って興奮の冷めるのを待った。彼はクラブ活動には“the old Adelphoi Theologia”という名の宗教団体以外には加わらなかった。その後、“the Conventicle”という名のクラブに入ったが、友人たちの面白い話に耳を傾けるだけで積極的なことはしなかった。このころからエマスンはロジックとレトリックに興味を持ちだした。3年生になるとギリシャの古典と数学が忙しくなり、哲学ではロック（John Locke）を精読した。この頃、理性こそ神の声という流行に反して奇跡的行為を信じるようになった。処女作『自然論』（*Nature* 1836. 9.）はそれまでのエマスン思想を活字にしたもので積極的な反抗精神はほとんど見られない。この年は経済的恐慌の年であったが、「超絶主義クラブ」（“The Transcendental Club”）の第1回会合（1836. 9.）が旗上げされた。ついで、第2作「アメリカの学者」（“The American Scholar”, 1837. 8. 31.）が講演された。これにはエマスンの愛国心が表現され、英国追隨の指導者の態度に対する彼の穏健冷静だが反抗的な精神が読み取れる。

これは当時のアメリカ知識階級の愛国的自己満足心を満たそうとする演説であるために美辞麗句に溢れた浪漫的朗唱になっている。音声価値を重視して言葉を選択し、語気を強めるように構文に配慮し、特定の聴衆に対する劇的效果を狙って要領よく要点をまとめている。弁論家エマスンが比喩的に‘sing’という意味曖昧な動詞を頻繁に使って愛国的儀式的雰囲気盛り上げているのは全篇を一種の詩にするのには大いに役立っている。抽象的宣伝の飾りを取り去ってエマスン思想の実体を見ると、理想的完全「人間」に関する神秘主義的説明である。彼が述べる「学者」は商人や農夫に対して特権を持ち、当時のアメリカ社会の指導者に対する不満を強調している。こうして聴衆の選民意識をくすぐりながら学者を考察し、学者の魂に不可欠のものとして、自然・過去・行動の三要素を中心に論を展開した。まず、分類の法則が精神の法則だと言う

が、その精神は彼の想像のものであって、現実の人間精神ではない。さらに彼は「魂の魂」(the soul of his soul) と言うが、「大霊」(Over-soul) に辿りつくまでの莫然とした思考状態にあったので「あまりにも大胆な思考、あまりにも途方もない夢」('A thought too bold, a dream too wild') と即興的に反省の態度を見せたところはしたたかである。そして、自然は学者に利益を与えると云って「靈魂」と「自然」の関係を美化し賛歌を唱える。続いて、読書のあり方を批判し、書物によって道具化された学者を明快に攻撃する。

この後の部分でエマソンは神と自然と人間をつないで汎神論的な立場を見せる。「世界—この靈魂の影」('The world—this shadow of the soul') と言って、自分が登場し、彼の学者とは自分自身のことだということが確認される。学者と創造、行動を語って、学者の義務に言及する。ここで彼は「自己信頼」('self-reliance') の重要性を語り、「英雄的精神のない学者はあり得ない」('there can be no scholar without the heroic mind') と断言する。学者は社会の指導者でなければならないというエマソンの社会観が明確にされ、それは『自然論』に見られる真・善・美という倫理的価値の絶対性を信じる楽天家であることを示している。それゆえに、エマソンの反抗精神は微弱なものだということが容易に想像できる。

ブルックファーム (Brook Farm) などの新しい運動がジョージ・リプリー (George Ripley) 主唱でウエスト・ロクスベリー (West Roxbury) に農園を求めて (1840. 10.), リプリー, ソフィア (Sophia Ripley), フラー (Margaret Fuller), オールコット (Bronson Alcott) がエマソン家に会合した。生存競争廃止, 相互扶助, 自由尊重, 株式組織, 配当年5分, 労働時間も仕事も自分で決める。労賃, 衣食, 燃料はブルックファーム組合が保証, 約70名をもって1841年に開始されたが、火災を起して47年秋解散した。この共同生活の困難は、失望して中途退会したホーソー (Nathaniel Hawthorne) の「ブライズデイル・ロマンス」("Blithedale Romance") によく描かれている。エマソンは参加しなかった。こういう新しい村はオールコットやソーロウ (H. D. Thoreau) によって、しばしば企画され、次々と失敗した。

一般の保守的な人はエマソンを狂人と見なしたが、エマソンは屈せずに直観

の絶対を信じた。その信ずるところは『随筆集』(*Essays*)に述べられていて、要約すれば、汝自身に頼れ、利益と損失は全生物界に通じる、「大霊」の命ずるままに生きよなどである。1837年頃からエマソンは時々、ウォルデン池まで散歩した。彼は森へ入ると感覚が透明になり、思索に耽ることが出来た。エマソンもソーロウのようにウォルデン池付近の森や野原をよく知っていた。思想は好むままに思想の方から語りかけてきて、エマソンはそれを文字にするだけであった。これらの思想は日記に書かれ、講演になり、1冊の本にまとめられたのが『随筆集・上』(1841)である。その中心は「自己信頼」と「報償」(“Compensation”)と「大霊」とである。そして、川波の囁きに耳を傾けて、1856年初夏に創ったエマソンの絶唱は校訂を重ねて約2年後に「アトランティック・マンスリー」(“the Atlantic Monthly”)の1858年1月号に発表された「現象とその奥の精神」を歌った詩「2つの河」(“Two Rivers”)であろう。晩年のエマソンが音楽性にも目を向けたことを物語る詩である。また、思想家としてのエマソンをよく現わし、ここにも直接的な反抗精神は見られない。

TWO RIVERS

THY summer voice, Musketaquit,
Repeats the music of the rain;
But sweeter rivers pulsing flit
Through thee, as thou through Concord Plain.

Thou in thy narrow banks art pent:
The stream I love unbounded goes
Through flood and sea and firmament;
Through light, through life, it forward flows.

I see the inundation sweet,
I hear the spending of the stream
Through years, through men, through Nature fleet,
Through love and thought, through power and dream.

Musketaquit, a goblin strong,
Of shard and flint makes jewels gay;

They lose their grief who hear his song,
And where he winds is the day of day.

So forth and brighter fares my stream, —
Who drink it shall not thirst again;
No darkness stains its equal gleam,
And ages drop in it like rain.

(大意)

マスケタクイット川よ、おまえの夏の声は、
雨の楽をくりかえしている。
しかし、もっと快い川がそのなかを脈打っている
おまえがコンコード平野をよぎるように。

おまえは狭い兩岸に閉じこめられている。
私が愛する流れは限りなく、
川と海と空のなかを通して。
光のなか、生命のなかを流れて行く。

私にその快いうねりが見える、
私にその流れの注ぐ音が聞こえる
歳月のなかを、人々のなかを、自然のなかを流れ、
愛と思想、力と夢のなかを流れる音が。

強い妖精マスケタクイット川は、
鉢の底石や火打ち石を輝く宝石にする。
その川の音を聞く人々は憂いを失い、
そのうねり行くところは最高の良き日になる。

私の川はこうして進み、いよいよ輝く、——
それを飲むものは誰でも二度と渴くことはない。
闇もその輝く光を汚せない。
時代は次々と雨のようにこの川に注いでいる。

1856年、超絶主義クラブに代るサタデー・クラブ (Saturday club) が創立され、エマソンはこのクラブを楽しみ、死ぬ1、2年前まで毎月最後の土曜日にはクラブの食卓に姿を見せた。1857年11月にボストンに新しい雑誌が生まれた。今日まで続いている「アトランティック・マンスリー」である。主宰は詩人で教授のローエル (James Russell Lowell)、主な寄稿者はホームズ (Oliver Wendell Holmes) で、エマソンも創刊号から28回も寄稿した。家計の都合で講演旅行を続けたエマソンはヴァーモント鉄道株に投資して大損したこともあった。*English Traits* 出版の頃、エマソンの講演者としての名声は頂点に達し、筆も最も冴えていた。健康状態も良くなっていた。そのころの著作が『処世論』 (*Conduct of Life*, 1860. 12.) である。これは常識的、現実的で、思索から日常生活に帰っている。エマソンの個性の半面であるヤンキイズムがここでは前面に押し出されている。そのために発売後2日で売りつくしたほど人気があり、カーライル (Thomas Carlyle) もこれをエマソンの最高作品だと激賞した。この作品では、人間にはのがれがたい運命がある。これは大霊の命ずるもので、結局は各個人のものである。無抵抗にこの運命に従う必要はなく、この運命に積極的に従うべきであると言った。また、人生の成功は、精神と肉体の合計の上に勇気を要すると説き、富は日常必需品からはじまり文化の構成力であり、富むことはあらゆる民族の傑作と主要人物に接することであると教え、将来を指導すべき宗教は知的でなければならず、新しい教会は道德科学の上に作られねばならないと主張した。ここにはエマソンの保守的見解が現われていて、大衆とは未完成な愚者であり、国家は優秀少数者によって指導されねばならないというエマソンの主観が述べられている。本書は一言でいえば、彼の道徳的義憤である。

奴隷解放問題は平静で孤立的なエマソンに熱情と勇気の発揮を促した。彼は南北戦争を喜びで迎えた。奴隷解放の正義を信じればこそ、南北の安易な妥協を嫌ったのであった。1863年1月1日の奴隷解放宣言日にエマソンがボストンの音楽堂で朗読したボストン讃歌は彼の気持ちをよく現わしている。リンカーン (Abraham Lincoln) に認められた彼はこの年に任命されてウエスト・ポイント士官学校の視察官になった。そして、1865年7月の終戦時に彼はハーヴァー

ードで出征学徒帰還歓迎の記念講演を行った。終戦を迎えてエマスは次のように語った。

It was “a joyful day... & proud to Alleghany ranges, Northern Lakes, Mississippi rivers & all lands & men between the two Oceans, between morning & evening stars.... Mankind has appeared just now in its best attitude around Mr Lincoln—in there recent experiences— & will laid him to use sanely the immense power with which the hour clothes him.”

南北戦争の間は一般人と同じくエマスも物質的には貧乏した。1861年6月から印税は入らなくなり、リディア (Lydia Jackson) の財産の利子も入らず、講演収入もゼロになり、土地を売ろうにも買い手がなく、1863年にやっと収入のある講演が出来た。1864年にコンコードの教育委員になり、1866年にはハーヴァードから文学博士号を送られ、監事に選ばれた。1865年、南北戦争終戦の7月の日記に、「この戦争が正義は成就されるという確信を多くの人の心に確立したこと、慢性的絶望の代りに、慢性的希望を確立したことはめざましい成果だと思⁽¹⁾う」と書いたが、11月の日記には、「戦後には、国家精神にあらゆる方向から偉大な展望——政治、宗教、社会科学、思想における真正の自由などが起こるだろうと期待していた。しかし、市民の力は戦争中に浪費されてしまったように思える。あらゆる関心が以前通りに狭量で臆病なものになってい⁽²⁾る」と書いた。戦後世界に対するエマスの期待は急速に薄れた。コンコードではエマスは老先生として村人と親しんだ。1870年、ハーヴァードはエマスに連続講義を依頼し、6週間にわたって毎週2つを行ったが、これは過労だった。それに不評でもあって彼は一層老いたことを痛感した。

1870年、『社会と孤独』(*Society and Solitude*)を出版した。大部分は1860年以前に書かれたものである。これは日常的なもののばかり12章で「中庸」をすすめている。要点は次のようである。孤独は本質的には必要だが、凡人には孤独であることは危険だ。正しい生活は中庸にある。国家は女性を正しい位置に置くのが文明の一目標だと述べ、良妻賢母主義を唱え、当時の婦人参政権運動には消極的であり、ここに彼の女性観がうかがえる。芸術作品とは神の心にあ

る形態の表現化したものだ。雄弁とは事実即して語ったもので、道徳的感情こそ雄弁の土台だ。農夫の職能は重要だが、仕事は困難を極めている。1年以上たたないものは読むな、有益なもの以外は読むな、好きなもの以外は読むなとすすめている。クラブは人を賢くするという利益はあるが、自立の与える利益を忘れてはならない。また、差し向かいで2人で語る利益も無視できないなど書いている。また、利害を超越した実行力の重要性を説き、主義のためには死をも恐れるなど述べている。自信は成功の第一の秘訣だ。才能より感覚が大切だ。静かな老年こそ賛美すべきものだと語っている。

1871年春に、娘イディス (Edith) の夫の父フォーブス (Forbes) の招待で、西部カリフォルニアを保養旅行した。秋には西部で講演旅行をしたがひどく疲れた。以後、人を避けて、書斎に引きこもるようになった。1872年7月24日の朝5時30分に目を覚ますと、自宅の火事を知った。人々の助けで火元の屋根裏部屋の書類を焼いただけで書物、原稿、家具は難を逃れた。2階は壊され、エマソンは風邪をひいた。友人の家で再建を考え、その間、彼は長女エレン (Ellen) を連れての保養旅行を勧められ、10月28日にニューヨークを出帆した。元気を回復して、11月7日にカーライルを訪ね2時間も雑談した。さらに、フランスに遊び、12月末カイロにつき、エジプトを見物した。3月にパリに戻り、ルナン (Joseph Ernest Renan)、テーヌ (Hippolyte Taine)、ツルゲーネフ (Ivan Sergeevich Turgenev) に会った。テーヌは翌日「英文学史」をエマソンに届けた。英国に帰って公開講演を終え、ブラウニング (Robert Browning) に会った。5月に大歓迎のなかを家につくと、元通りの家が建っていた。健康を回復し、随筆原稿の整理をはじめたが不可能なことを知り、キャボット (James Cabot) に仕事を依頼した。

『文学と社会の目的』 (*Letters and Social Aims*, 1876) を出版したが、新しいものではなく、このなかでは「詩と想像力」が最もいい。これは従来の彼の文学論の多くを再述したものである。エマソン最後の講演 (1881. 7.) はコンコード・ライシウムにおける「貴族」であったが、これは彼自身では書けなかった。1875年4月19日、コンコード戦闘100年記念日に講演をしたのが彼の最後の原稿であった。さらに時々、少数の聴衆に講演をしたり、雑誌に論

文を發表したりした。読書は疲れがひどく、森の散歩が最大の楽しみになった。1876年6月にはヴァージニア大学に招かれて講演をしたが、南北戦争の反感が残っていて楽しくなかった。この頃から書物が売れはじめたが、エマスンは1882年4月27日夕刻、世を去った。4月30日の告別式で、スリーピー・ホローの高い松の根元に埋められた。そこには母と息子が眠っており、ソー、ソーソンも近くに眠っている。エマスの自然石の墓石の表面には彼の詩の一節が刻みつけられている。

The passive Master lent his hand
To the vast soul that o'er him planned.

穏健なエマスンは忍耐力過剰という弱さゆえに言行不一致であった。その彼も時代の影響で反抗心を燃やしたこともある。以下、それについて述べてみる。

II 「神学部講演」(“An Address”, 1838. 7. 15.)

「神学部講演」はエマスンが対神観を述べたハーヴァード神学部卒業予定者に対する招待講演である。ここに述べられた彼の対神観は歴史的キリスト教に対する反抗的なものである。聴衆は、卒業予定者・在学生・教授・牧師などであった。

The intuition of the moral sentiment is an insight of the perfection of the laws of the soul. These laws execute themselves. They are out of time, out of space, and not subject to circumstance. Thus in the soul of man there is a justice whose retributions are instant and entire. He who does a good deed is instantly ennobled. He who does a mean deed is by the action itself contracted. He who puts off impurity, thereby puts on purity. If a man is at heart just, then in so far is he God; the safety of God, the immortality of God, the majesty of God do enter into that man with justice. If a man dissemble, deceive, he deceives himself, and goes out of acquaintance with his own being.

A man in the view of absolute goodness, adores, with total humility. Every step so downward, is a step upward. The man who renounces himself, comes to himself.⁽³⁾

ここでエマスンが言う道德感情 (moral sentiment) とは、人間が宇宙の法則を知る時、心中に目覚める感情のことで、これが至福感を与える宗教生命だとエマスンは考えた。宗教とは記録に書きとどめられないものだと考えたから、歴史的・制度的な宗教にしては価値を認めなかった。これは既成キリスト教に対する強烈な反抗である。

When a man comes, all books are legible, all things transparent, all religions are forms. He is religious. Man is the wonderworker. He is seen amid miracles. All men bless and curse. He saith yea and nay, only. The stationariness of religion; the assumption that the age of inspiration is past, that the Bible is closed; the fear of degrading the character of Jesus by representing him as a man;—indicate with sufficient clearness the falsehood of our theology. It is the office of a true teacher to show us that God is, not was; that He speaketh, not spake. The true Christianity,—a faith like Christ's in the infinitude of man,—is lost. None believeth in the soul of man, but only in some man or person old and departed. Ah me! no man goeth alone. All men go in flocks to this saint or that poet, avoiding the God who seeth in secret.⁽⁴⁾

道德感情が心のなかに目覚めることによって神と対話ができるというのは彼の神秘主義である。しかも、神の声は体験を通して把握されなければならないとエマスンは確信した。彼がこの考え方を心に抱いたのは、牧師就職を決意した頃である。その頃、彼は「説教は最も重要なものであり、その成否は想像力の有無にかかり、魅力的な説教だけが会衆に感動を与えることができる⁽⁵⁾」と書いたが、説教に専念することは現実には許されなかった。正牧師に任命された時、牧師達の態度に失望し、彼等と共に旧来の形式を守って教区の雑用に努力することは愚劣極まりないと彼には思われた。エマスンの精神世界にある理想⁽⁶⁾

の教会と、形式だけに頼る現実の教会との間の断層はあまりにも大きすぎた。⁽⁷⁾
 やがて、彼は儀式に堪えられなくなって教会を去る決意をした。⁽⁸⁾ 教会に対する彼の不満の声は、真実の叫びであり、反抗の声であった。牧師職は時代遅れだと彼は考えた。⁽⁹⁾ こう彼に考えさせたものは教会の形式主義に対する反抗心であった。この頃までのエマソンの宗教観を総括したものが説教「主の晩餐」⁽¹⁰⁾ (“The Lord’s Supper”, 1832. 9. 9.) である。これは、彼が教会を去る直接原因になった聖餐式に対する懐疑と反抗の表明であった。ここで思い出されることは、聖餐式をあまりにも重視しすぎたためにエドワーズ (Jonathan Edwards) は教会を追われたという事実である。「主の晩餐」においてエマソンは「従来、聖餐式については多くの議論がなされてきた。イエスは最後の晩餐をキリスト教の儀式として制定しようなどとは考えもしなかった。最後の晩餐はエルサレムの人が祝う過越の祭の晩餐にほかならない」と述べる彼は聖餐式の意義を認めなかった。彼が形式に反抗したのは、魂が直接に神と対話することだけが信仰だと信じたからにほかならない。それゆえに、イエスを礼拝することは神に対する礼拝を怠ることであり、聖餐式は神と人間との直接関係を妨害するものだ⁽¹¹⁾とエマソンは感じた。「主の晩餐」は魂に対する束縛を拒否せよという説教であり、教会の牧師として形式主義を守ってきたエマソンが過去の自分と別れて、欲しないことは一切しないと誓った反抗であった。しかし、辞表のなかで事情がいかに変化しようとも真理に献身することには変りないと書いていることなどから、彼には従来のキリスト教と断固として訣別する意志はなかったことは明らかである。彼の反抗は不徹底なもので、そのために彼は新しい宗教を作れなかった。「神学部講演」は「主の晩餐」の延長である。ユニテリアニズムは新興商人階級を背景にした新宗派で多くのボストン市民に賛成され、18世紀末から19世紀にかけてボストンの多くの教会は内容的にはユニテリアニズム教会に変質していた。ユニテリアン派と公称した最初の教会は1813年に誕生した。ユニテリアニズムはボストンから東部諸州にひろまった。保守的なピューリタニズムに反抗してこの新宗派に走ったリベラルな人々は政治・商業優先で宗教を第二次的に考えたのは当然である。ハーヴァードの教授の多くがユニテリアンに変ったことは社会的に大きな影響を与えた。ユニテリ

アニズムの特色は、カルヴィニズムの中心教義である三位一体説を否定し、父なる神を唯一神とみなし、神の下では万人は兄弟であり、選民などという差別はあり得ず、イエスを宗教的天才、聖書を倫理的書物とみなし、奇跡の理性的再検討を要求した。また、善行と信仰によって自己救済が可能であり、怒りの神とか原罪とかいうものは存在せず、人間は完璧になり得る霊的存在者だなどということである。

ユニテリアニズムは、神秘性・飛躍性・情熱を拒否し、感覚によってすべてを冷静に単純化しようとし、商人階級を背景にした散文的・理性的な宗教なので、神を恐れずに事業活動をする人々には無限の力を与えた。一般には、1819年のボルティモアにおけるスパークス（Jared Sparks）の聖職授任式の時のW. E. チャニングの説教（ボルティモア説教と呼ばれている）をユニテリアン派の出発点とする。このユニテリアン派が約10年間で、時代の指導思想でなくなった理由は、第一に宗教的情熱を欠いていたからであり、第二に1830年頃から商業資本主義社会体制が産業資本主義社会体制へ移行したためであり、第三に19世紀に入って急速に進んだ西部開拓運動のためである。エマスンが「神学部講演」を行った頃には、ユニテリアニズムもピューリタニズム同様に形式化していた。そのために、物質的社会体制に反対して、空想的自然社会を憧れていたエマスンは、教会の儀式に束縛されずに直観による神との直接対話を求めて、ユニテリアン教会に反抗した。

My good Henry Thoreau made this else solitary afternoon sunny with his simplicity and clear perception. How comic is simplicity in this double-dealing, quacking world. Everything that boy says makes merry with society, though nothing can be graver than his meaning. I told him he should write out the history of his college life, as Carlyle has his tutoring. We agreed that the seeing the stars through a telescope⁽¹²⁾ would be worth all the astronomical lectures.

『自然論』の著者として名が出はじめたエマスンは、ボストンの冬季連続講演（1837—38）で好評を収めたために、1838年3月に「神学部講演」を依頼された。以前から若い聖職者の態度に不満を抱いていたエマスンは、好機を逃す

ことなく進んで依頼を承諾した。

I looked over the few books in the young clergyman's study yesterday till I shivered with cold: Priestley; Noyes; Rosenmuller; Joseph Allen, and other Sunday School books; Schleusner; Norton; and the *Saturday Night* of Taylor; the dirty comfort of the farmer could easily seem preferable to the elegant poverty of the young clergyman.⁽¹³⁾

What shall I answer to these friendly youths who ask of me an account of Theism, and think the views I have expressed of the impersonality of God desolating and ghastly? I say, that I cannot find, when I explore my own consciousness, any truth in saying that God is a person, but the reverse. I feel that there is some profanation in saying, He is personal. To represent him as an individual is to shut him out of my consciousness.... The Belief in Christianity that now prevails is the Unbelief of men. They will have Christ for a Lord and not for a Brother. Christ preach the greatness of man, but we hear only the greatness of Christ.⁽¹⁴⁾

There is no better subject for effective writing than the Clergy. I ought to sit and think, and then write a discourse to the American Clergy, showing them the ugliness and unprofitableness of theology and churches at this day, and the glory and sweetness of the moral nature out of whose pale they are almost wholly shut.⁽¹⁵⁾

Cool or cold, windy, clear day. The Divinity School youths wish to talk with me concerning Theism. I went rather heavy-hearted, for I always find that my views chill or shock people at the first opening. But the conversation went well and I came away cheered. I told them that the preacher should be a poet smit with love of the harmonies of moral nature;—and yet look at the Unitarian Association and see if its aspect is poetic. They all smiled No. A minister nowadays is plainest prose, the prose of prose. He is a warming-pan, a night-chair at sickbeds and rheumaticc souls; and the fire of the minstrel's eye and the vivacity of his word is exchanged for intense, grumbling enunciation of the Cambridge sort, and for Scripture phraseology.⁽¹⁶⁾

10名たらずの卒業予定者は人間エマソンに魅力を感じたが、思想については「主の晩餐」によって明示されていたにもかかわらず、理解していなかった。そのために学生達に事件がふりかかった。その頃の超絶主義者達の革新的意見を見ると、リプリーは説教(“Jesus Christ, the Same Yesterday, Today, and Forever”)を行ない、ブラウンソンは激しい調子のパンフレット(“New Views”)を出版していた。また、パーカー(Theodore Parker)は講演(“The Transient and Perm Permanent in Christianity”, 1841. 5. 19.)を行なってエマソン以上に大問題をひき起して、「神学部講演」事件を影の薄いものにしてしまった。後日、パーカーは一連の講演をまとめた論集(*A Discourse of Matters Pertaining to Religion*, 1842)を出版した。パーカーはユニテリアン派牧師のなかでは最も急進的な社会革論家であり注目すべき人物であった。

超絶主義の特色は、ニュー・イングランド・ピューリタニズムの反抗精神と18世紀啓蒙思想とが並存している点にある。超絶主義者エマソンが1832年に教会を去った後、ニュー・イングランド・ユニテリアニズムの牙城ハーヴァード大学神学部において講演をするということは彼にとって絶好の機会であった。この時代には、ユニテリアン教会の内部に留まって革新を策した牧師達と、その腐敗ぶりに見切りをつけて超絶主義思想を抱く牧師達があった。ボラー(Paul F. Boller, Jr.)の説明はこの点に関して簡明である。

American Transcendentalism began as a revolt against historical Christianity. It developed as a protest movement within the Unitarian Church in New England (particularly in the Boston area) during the 1830's and its most prominent spokesmen were Unitarian clergymen, like Ralph Waldo Emerson, who had studied at the Harvard Divinity School. In its deepest reaches Transcendentalism was a quest for authentic religious experience. It rejected forms, creeds, rites, and verbal explanations and sought to penetrate to the heart of things by a direct, immediate encounter with reality. Its objective, Emerson announced, was an original relation with the universe.

“Whenever the pulpit is usurped by a formalist,” complained Emerson in his famous Divinity School Address, “then is the worshipper defrauded

and disconsolate.” Then he went on to express his Transcendental discontents with the churches of his day: I once heard a preacher who sorely tempted me to say I would go to church no more. . . .

Emerson was not the only Unitarian minister to leave the church at this time. George Ripley resigned from the Purchase Street Church in Boston with similar discontents in 1840 and went on to found the Brook Farm Association. Christopher P. Cranch preached for a time after leaving Harvard and then abandoned the ministry for poetry and landscape painting. John S. Dwight also served as a minister only briefly and then left the profession to become a musical journalist. Like Emerson, all of these men had attended the Divinity School at Cambridge, the Unitarians’ pride and joy, and all of them had come, mainly under Emerson’s influence, to adopt what were called the “New Views” about religion. There were, to be sure, ministers who sympathized with the New Views but who continued their pastorates. Frederic Henry Hedge of Bangor, Maine, and James Freeman Clarke of Louisville, Kentucky, were among the best known. Theodore Parker, one of the most outspoken exponents of the New Views, also remained in the church, though orthodox Unitarians would have minded it not a bit had he defected. In addition to clergymen with Transcendental leanings, there were countless laymen—young men and women brought up as Unitarians—who were dissatisfied with the church and receptive to the New Views. “I have let myself be cheated out of my Sunday,” lamented Margaret Fuller after attending a Unitarian service and hearing a boring sermon on the deficiencies of Calvinism. “That crowd of upturned faces, with their look of unintelligent complacency!” Her feelings were widely shared by young Unitarians in Boston and Cambridge. “Pale negations,” “corpse-cold,” “lifeless,” “formalistic”—these became common complaints about Unitarianism among the young in eastern Massachusetts in the 1830’s. Even William Ellery Channing, the “grey eminence” of Boston Unitarianism, acknowledged that a “heart-withering philosophy” pervaded his church, though he had substantial reservations about the New Views.⁽¹⁷⁾

エマスンが「神学部講演」で注力したことは、形式的・伝統的権威への攻撃であった。この攻撃を有効にするために、彼は魂の権威を強調し、魂を精神界の最高審判者にしようとした。そのため、「善の實在・悪の非實在」と「直観による真理認識の可能性」という二大仮説を作った。イエスの偉大さは自己信頼こそ真理だということの認識によるものであり、キリスト教の本質は魂の教えだという点にあるとエマスは断言して、歴史的キリスト教の二大欠点を指摘した。第一に、歴史的キリスト教は魂の教義を教えず、人間イエスを絶対視し、彼の言葉を信仰しているとエマスは非難した。イエスと一般人との相違は程度の差にすぎないと言ってエマスはイエスの神性を否定した。もし、イエスに神性があるならば万人も神性をもつはずだが、そのことを教会は教えない。第二に、説教者が歴史的キリスト教の権威を失墜させるような発言をすると教会はその人を追放するということを非難した。聖職者とは心中の神が会衆に真理を語りかけるのでなければならぬが、現在、どれだけの聖職者が神を心中に宿しているであろうかと彼は攻撃し、教会は自己信頼のない形式的社交場になりさがっていると批判した。彼の反抗精神はここに燃え上った。

The unbelief of the age is attested by the loud condemnation of trifles. Look at our silly religious papers. Let a minister wear wear a cane, or a white hat, go to a theatre, or avoid a Sunday School, let a school-book with a Calvinistic sentence or a Sunday School book without one be heard of, and instantly all the old grannies squeak and gibber and do what they call 'sounding an alarm,' from Bangor to Mobile. Alike nice and squeamish is its ear. You must on no account say 'stink' or 'Damn'⁽¹⁸⁾.

しかし、これら二大欠点に対して、「安息日」と「説教」という二大長所があると述べた。「神学部講演」は三部に分けて考えられる。

(第一部) 自然賛美という彼の第一声に、保守的宗教人は驚いた。自然のなかに生きる人間の喜びと世界の完全さを歌うのは、例によって、エマスの議論導入方法である。宇宙の法則が明らかにされると、この完全な自然世界は萎縮して精神の寓話になってしまうとエマスは語って、自然と精神を対応させ

ながら論点を自然から精神へ移行させた。しかし、この講演では、彼は精神と言う代りに道德感情という言葉を用いた。講演が進むにつれて、幾分明瞭になってくるが、道德感情とは精神・理性・直観・想像力などのあいまいな別名である。エマソンは決して明瞭ではない。彼は、真理は曖昧なところにだけ求められると考える神秘家であったので、スウェーデンボルグ (Emanuel Swedenborg)、プロティノス (Plotinus)、ハーフィズ (Shams-Ed-Din Muhammd Hafiz)、東洋の思想家に関心を持った。この講演で、道德感情を宗教の本質だと呼んで道德と宗教とを彼が結んだのは、あまりにも墜落している当時の教会に対するエマソンの心に生き残ったピューリタン・エマソンの叫びである。道德感情は神聖であるだけでなく、触れるものを神聖化して個人に神性を与えるものだとエマソンは考えた。彼の全講演に共通する主題である「個人に神性を与えるもの」がこの道德感情である。この感情は媒介者によらず、心中の神と対話することによって自覚され、その結びつきの動因は直観であるとエマソンは信じた。彼は自分の理論の有利な展開を考えて、道德感情は報償の精神のなかにあると語った。さらに、具体的な事物に表現される報償の精神は宇宙の調和と秩序を説明していると彼は述べた。宇宙の調和と秩序を認めるものは直観であるから、直観を欠く者はそれらを認識することができない。これではピューリタンの選民思想と同じである。しかし、世界の調和が乱されると報償の精神によって調和が回復されるとエマソンは楽天的に考えた。結局、調和とは神の摂理にはかならない。

(第二部) エマソンが道德感情によって教会の現状を批判した部分である。彼は教会史における誤りを指摘して、この誤りが人間を墜落させていると断定した。教会の教義は直観的教義ではなく、儀式的なものにすぎないと彼は言った。教会は「宇宙の調和とは無関係な有限」を追求しているにすぎないと彼は非難した。エマソンは歴史的キリスト教に激しく反抗しているが、近代主義の立場からキリスト教の非合理性を批判しているのではない。とにかく、伝統的ピューリタンの厳格さと情熱とをもって、当時の冷たく道德性を欠いた商人的な宗教ユニテリアニズムの否定的態度と、説教壇の炎を消して怠惰な説教者を作る形式主義に反抗したのである。

（第三部）教会の墜落を救う方法としては礼拝形式の改善や新形式の制定は不要で、新生命を旧形式に吹き込むべきだとエマソンは結論した。教会の混乱救済の必要性を神学部卒業予定学生に訴え、教区民訪問などの雑務は省略して神と直接に対話できる人間になれと彼は激励した。また、卒業予定者に対して、職業として礼拝式を主宰する牧師になるのではなく、心中の神の声を信徒に伝えよと命令し、さらに、神の声を伝えるだけでなく、人間としての牧師自身の言葉も聞かせよと要求し、そのためには、自己信頼の精神を堅持せよと教えた。

この講演では、道德感情とは個人に神性を与えるものだとエマソンは語ったが、その後、ボストンにおける冬季連続講演（1841—42）では、道德感情とは神の別名だと述べている。しかし、エマソンは具体的には何も教えていない。彼は論理を超越せよと言って正面攻撃を避け、むしろ逃亡して象徴に頼るだけであった。この講演も例の如くに非論理的であり、宗教的直観を礼賛した一種の詩的神学講演である。このなかで述べられたエマソンの「歴史的キリスト教批判」と「霊魂以外には権威を認めない自己信頼の教義」とは保守的宗教人、とくにハーヴァードのユニテリアン派教授に痛烈なエマソン批判を与える原因になった。エマソンの教会攻撃は彼等の目にはそれほど鋭利に映った。この結果に驚いた学生はこの講演を印刷配布すべきかどうか迷ったが、慣例に従って配布した。その結果、「ボストン日刊誌」（“The Boston Daily Advertiser”, August 27.）紙上でノートン（Andrews Norton）教授が匿名で酷評し、公然とエマソンを背信者と決めつけた。しかし、エマソンはこれを驚くには当らないと受け取り確固とした信念を示した。その他、異端者、無神論者、危険分子などという非難をエマソンは受けたが、自己信頼に立つエマソンは平然としていた。外見的に彼は確固とした一面を持っていた。

Censure and Praise.—I hate to be defended in a newspaper. As long as all that is said is said *against* me, I feel a certain sublime assurance of success, but as soon as honied words of praise are spoken for me, I feel as one that lies unprotected before his enemies.⁽¹⁹⁾

It seems not unfit that the scholar should deal plainly with society and tell them that he saw well enough before he spoke the consequence of his speaking; that up there in his silent study, by his dim lamp, he fore-heard this Babel of outcries. The nature of man he knew, the insanity that comes of inaction and tradition, and knew well that when their dream and routine were disturbed, like bats and owls and nocturnal beasts they would howl and shriek and fly at the torch-bearer. But he saw plainly that under this their distressing disguise of bird-form and beast form, the divine features of man were hidden, and he felt that he would dare to be so much their friend as to do them this violence to drag them to the day and to the healthy air and water of God, that the unclean spirits that had possessed them might be exercised and depart. The taunts and cries of hatred and anger, the very epithets you bestow on me, are so familiar long ago in my reading that they sound to me ridiculously old and stale. The same thing has happened so many times over (that is, with the appearance of every original observer) that, if people were not very ignorant of literary history, they would be struck with the exact coincidence. I, whilst I see this, that you must have been shocked and must cry out at what I have said, I see too that we cannot easily be reconciled, for I have a great deal more to say that will shock you out of all patience.⁽²⁰⁾

超絶主義者はエマス思想に近い考え方を持ち、「心の内なる光」を信じるブラウンスンの編集誌(“Boston Quarterly Review”)で、エマス思想に全面的賛成はできないとしても彼の独立精神は賞賛に価すると書いて弁護した。当時のエマスの気持は次のカーライル宛の手紙にうかがえる。

... In a letter within a twelvemonth I have urged you to pay us a visit in America, & in Concord. I have believed that you would come, one day, & do believe it. But if, on your part, you have been generous & affectionate enough to your friends here—or curious enough concerning our society to wish to come, I think you must postpone, for the present, the satisfaction of your friendship & your curiosity. At this moment, I would not have you here, on any account. The publication

of my "Address to the Divinity College," (copies of which I sent you) has been the occasion of an outcry in all our leading local newspapers against my "infidelity," "pantheism," & "atheism." The writers warn all & sundry against me, & against whatever is supposed to be related to my connexion of opinion, & c; against Transcendentalism, Goethe & *Carlyle*. I am heartily sorry to see this last aspect of the storm in our washbowl. For, as Carlyle is nowise guilty, & has unpopuliarities of his own, I do not wish to embroil him in my parish-differences. You were getting to be a great favorite with us all here, and are daily a greater, with the American public, but just now, *in Boston*, where I am known as your editor, I fear you lose by the association. Now it is indispensable to your right influence here, that you should never come before our people as one of a clique, but as a detached, that is, universally associated man; so I am happy, as I could not have thought, that you have not yet yielded yourself to my entreaties. Let us wait a little until this foolish clam [or] be overblown. My position is fortunately such as to put me quite out of the reach of any real inconvenience from the panic strikers or the panic struck; &, indeed, so far as this uneasiness is a necessary result of mere inaction of mind, it seems very clear to me that, if I live, my neighbors must look for a great many more shocks, & perhaps harder to bear. The article on German Religious Writers in the last Foreign Q. R. suits our meridian as well as yours; as is plainly signified by the circumstance that our newspapers copy into their columns the opening tirade & *no more*. Who wrote that paper? And who wrote the paper on Montaigne in the Westminster? I read with great satisfaction the Poems & Thoughts of Archaeus in Blackwood: "The Sexton's daughter" is a beautiful poem: and I recognize in them all, *the* Soul, with joy & love. Tell me of the author's health & welfare; or will not he love me so much as to write me a letter with his own hand?—And tell me of yourself,—what task of love & wisdom the muses impose: & what happiness the good God sends to you & yours. I hope your wife has not forgotten me.

(21)
Yours affectionately, R. W. Emerson

エマスの講演を感動的なものと受け取ったパーカーがノートン教授の批判に対して書いたパンフレット(*The Previous Question between Mr. Andrews Norton and His Alumni Moved and Handled in a Letter to All Those Gentlemen*, 1840)を出版してこの問題に一応の結着をつけた。講演の翌年のエマスの日記を見ると、各人の感じ方は異なるから自由に生きようとして、この講演に対する不快な非難を無視する態度を示した。激しく反抗するにはエマスの戦闘精神はあまりにも弱く、彼は忍耐の反抗の人であった。神と直接に語れと言うエマスの宗教論には「原罪」とか「十字架による贖罪」がないから、ピューリタンから見れば異端者に違いないが、ユニテリアンから見れば、異端者ではない。ピューリタンはエマスはユニテリアンのなれの果てだと言ってユニテリアンを嘲笑できるが、ユニテリアンから見ればエマスは裏切者である。ハーヴァードのユニテリアンは長くエマスにハーヴァードで講演することを許さなかった。エマスは心中に神ありと言ってピューリタンに反対したが、道徳復権目的という意味ではピューリタニズムへの復帰であった。神と対話すれば誰でもキリストになれると信じたエマスはイエスを人間に戻して信仰を人間中心のものにしたと言える。大問題を起こした理由は自己信頼の強調ということもあるが、煽動的超論理の雄弁を使い、意味不明な用語を使用したからでもあった。エマスは説教者は道徳に感動した詩人でなければならないと考えたが、彼自身は詩人的すぎて、その論は検討に十分には堪えられない。エマスは因襲的な大学教育や文学作品は無用だと日記に書いた。

How sad a spectacle, so frequent nowadays, to see a young man after ten years of college education come out, ready for his voyage of life, —and to see that the entire ship is made of rotten timber, of rotten, honeycombed, traditional timber without so much as an inch of new plank in the hull.⁽²²⁾

All conversation among literary men is muddy. I derive from literary meetings no satisfaction. Yet it is pity that meetings for conversation should end as quickly as they ordinarily do. They end as soon as the blood is up, and we are about to say daring and extraordinary

things. They adjourn for a fortnight, and when we are reassembled
we have forgot all we had to say.⁽²³⁾

エマスの内在神が検討に堪え、その思想が宗教というよりも人間中心哲学ならば、論理がなくても哲学体系の構築を彼は試みたかも知れない。宗教家としては、歴史的キリスト教に徹底反抗ができなかった所以他はエマス教を作れなかった。彼は歴史的キリスト教を完全に捨てるべきであった。実際には、エマスはキリスト教社会に内輪もめを起こしたにすぎなかった。楽天的に性善説を取るエマスは原罪を認める性悪説に立つ聖書を信じていなかった。しかも、真実の神を示さないという理由でキリスト教会に反抗したのがエマスの「神学部講演」であった。

... The errors of traditional Christianity as it now exists, the popular faith of many millions, need to be removed to let men see the divine beauty of moral truth. I feel myself pledged, if health and opportunity be granted me, to demonstrate that all necessary truth is its own evidence; that no doctrine of God need appeal to a book; that Christianity is wrongly received by all such as take it for a system of doctrines,—its stress being upon moral truth; it is a rule of life, not a rule of faith.

And how men can toil and scratch so hard for things so dry, lifeless, unsightly, as these famous dogmas, when the divine beauty of the truths to which they are related lies behind them; how they can make such a fuss about the case, and never open it to see the jewel, is strange, pitiful.⁽²⁴⁾

エマスは永遠の法則などと言って神を表現したが、この法則の解明を避けた。神はエマスにとっては空想で作った仮説にすぎない。しかし、宗教とは心理的満足を与える精神療法ならばエマスが非難される理由はない。宗教が信者に安心感を与えるためには儀式が必要である。人間は神になれば、悲劇は存在しないと言うエマスはユニテリアン派牧師の墮落を非難したが、ピューリタンの熱烈な説教者を尊敬した。自己信頼を楯にした弱いエマスは力強さを

愛した。

The history of Christ is the best Document of the power of Character which we have. A youth who owed nothing to fortune and who was 'hanged at Tyburn,'—by the pure quality of his nature has shed this epic splendor around the facts of his death which has transfigured every particular into a grand universal symbol for the eyes of all mankind ever since.

He did well. This great Defeat is hitherto the highest fact we have. But he that shall come shall do better. The mind requires a far higher exhibition of character, one which shall make itself good to the senses as well as to the soul; a success to the senses as well as to the soul. This was a great Defeat; we demand Victory. More character will convert judge and jury, soldier and king; will rule human and animal and mineral nature; will command irresistibly and blend with the course of Universal Nature.... I am *Defeated* all the time; yet to Victory I am born.... A saint, an angel, a chorus of saints, a myriad of Christs, are alike worthless and forgotten by the soul, as the leaves that fall, or the fruit that was gathered in the garden of Eden in the golden age. A new day, a new harvest, new duties, new men, new fields of thought, new powers call you, and an eye fastened on the past unsuns nature, bereaves me of hope, and ruins me with a squalid indigence which nothing but death can adequately symbolize.⁽²⁵⁾

「神学部講演」には、自由主義者エマスと保守主義者エマスの両者がうかがえる。⁽²⁶⁾彼の日記や手紙には、彼の講演内容と矛盾することが多く書かれている。彼にはカリスマがなく魔術師として新興宗教を作るには非力すぎた。直観によって神と対話ができれば教会とか十字架とか神像とかは無用であり、宗派なども政治家同様に金集め団体にすぎなくなってしまう。エマス自身も宗派は無用だと思っていた。

I hear with pleasure that a young girl in the midst of rich, decorous Unitarian friends in Boston is well-nigh persuaded to join the Roman Catholic Church. Her friends, who are also my friends, lamented to

me the growth of this inclination. But I told them that I think she is to be greatly congratulated on the event. She has lived in great poverty of events. In form and years a woman, she is still a child, having had no experiences, and although of a fine, liberal, susceptible, expanding nature, has never yet found any worthy object of attention; has not been in love, not been called out by any taste, except lately by music, and sadly wants adequate objects. In this church, perhaps, she shall find what she needs, in a power to call out the slumbering religious sentiment. It is unfortunate that the guide who has led her into this path is a young girl of a lively, forcible, but quite external character, who teaches her the historical argument for the Catholic faith. I told A. that I hoped she would not be misled by attaching any importance to that. If the offices of the church attracted her, if its beautiful forms and humane spirit draw her, if St. Augustine and St. Bernard, Jesus and Madonna, cathedral music and masses, then go, for thy dear heart's sake, but do not go out of this icehouse of Unitarianism, all external, into an icehouse again of external. At all events, I charged her to pay no regard to dissenters, but to suck that orange thoroughly.⁽²⁷⁾

文化の出発点はすべて仮説である。エマソンが仮説から出発してエマソン世界を作ったことは評価できる。文明興亡のサイクル末期には宗教が要求されたことは歴史的事実で、エマソンはニュー・イングランド植民以来の第1期アメリカ文明末期を飾る1人であった。心中でキリスト教と訣別するつもりがないエマソンが異端的なことを口走って教会改革を唱えても、所詮、彼にはエマソン教創立の反抗力がなかったことの証明にすぎない。彼の詩「問題」(“The Problem”, 1839. 11. 10. 作; “Dial” 創刊号1840. 7. 発表)は当時の彼の気持を表現している。神も悪魔も人類と共に消え去るもので、妄想が作った精神的玩具に違いない。多くの偶像が博物館に並んでいるが、エマソン時代には旧キリスト教が末期の息を荒げていた。性善説と心中の神を主張しても生命をかけた反抗など想像もできなかったエマソンは産業発達と西部開拓の波にある程度まで乗った。南北戦争は思いもよらず、一般人は純粋に宗教を求めていると

楽天的に信じたから「反抗」は黒人売買を目撃するまで十分に彼は理解しなかった。

要約すれば、すべては神意によるというピューリタニズムではなく、人間自身に自己救済力が備わっているというユニテリアニズムを学んだところにエマソンの進歩思想の出発点があった。ここから進んで選民思想を拒絶し、キリストの神性を否定するに至った。牧師エマソンは矛盾に苦悩したが、理想の教会と現実の教会との差違を痛感し、教会制度に懐疑を抱き、内在神を最高と考えようになった。この点にエマソン自身が神になる危険性が存在した。それはとにかくとして、「神学部講演」に見られる反抗はキリスト教世界のなかの嵐にすぎない彼の独断論表明であった。

III ブルック・ファーム (Brook Farm)

社会主義の実験農場ブルック・ファームの指導者達が超絶主義とフーリエ主義 (Fourierist Socialism) を調和させようとした問題に対するエマソンの反抗精神はどの程度のものであったか。1834—38年頃の超絶主義者達は迎合を排撃したが個人主義を強調し、自然に生きることを主張した。しかし、この運動が成長する前にジャクソン (Jackson) の平等主義運動や産業革命や1837年の恐慌などがリプリーやジョン・S・ドワイト (John Sullivan Dwight) などの超絶主義者達から個人主義を捨てさせた。1841年にリプリーは同志をひきいてマサチューセッツのウエスト・ロクスベリーでブルック・ファームを開設した。1844年1月には、ブルック・ファームの指導者はフーリエ主義へ転向し、ブルック・ファーム運動はニュー・イングランド労働運動に強い影響を与えた。

多くの超絶主義者と一部のフーリエ主義者はこの二つのイデオロギーは共存不可能だと考えていた。エマソン、フラー、オールcott達はブルック・ファーム運動の主旨には賛成したが、参加を拒否した。フーリエ主義が有力になるとブルック・ファーム会員はエマソンの個人主義よりも公共福祉を重視する傾向を強めた。この運動に懐疑的であったホーソーンは困難な実生活と芸術埋没

に不満を感じてブルック・ファームを去った。その他の超絶主義者達もブルック・ファームの自主的傾向はフーリエ主義によって破壊されたと考え、一部の超絶主義者達はブルック・ファームを去った。1845年までにフーリエ主義者達は多様なイデオロギーに寛大な超絶主義者達を激しく批判した。ブルック・ファーム崩壊の危機に瀕した1846年には有力なフーリエ主義者⁽²⁸⁾ケイは超絶主義とフーリエ主義は対立するもので、超絶主義者は社会主義の指導権を捨てるべきだと語った。リプリーさえも両イデオロギーは両立できず、個人主義は捨てるべきだと言った。しかし、これはリプリーがうっかり言ったもので、多くの人々は両イデオロギーは共存できると信じていた。

エマスンやソーロウは人間が専門化されることに反対した。この問題を解決しようと考えたのはリプリーであった。ブルック・ファームにおける肉体労働と頭脳労働の分類は、労働者から文化的権利を奪い、知識人から労働を奪うと彼は信じたからであった。農場事業が軌道に乗ると多くの仕事が現われ、各自が希望する職務に従事することが出来るようになった。リプリーは社会主義社会が超絶主義者の目的である「自由達成」を果たせると公約した。しかし、エマスン主義者達は自由とは創造的自由だと考えて譲らなかった。フーリエ主義者は科学がブルック・ファーム計画を完遂できると保証した。そして、貧乏、悪徳、罪などは無秩序な社会的関係から生じ、社会主義の社会では人間の本性は完全だと主張した。フーリエ自身によれば、本能、感情、興味などでさえも神から与えられたものである。リプリーは欲望は神との約束によるものだと断言し、いかなる感情でも感謝して受け取れば、調和した個性や社会が実現されると主張した。エマスンは、「私が悪魔の子なら悪魔として生きよう」と公言したが、フーリエもリプリーもエマスンを許さなかった。フーリエは神が創造した宇宙の調和のなかで人間だけが調和からはずされていると言った。フーリエの考え方に賛成したリプリーは、個人の自由を犠牲にしていると責める人々に反論し、競争社会では人間は奴隷にされていると主張した。非難に対しては、リプリーはブルック・ファームは社会主義達成のための試みにすぎないと言って反論した。リプリーは、資本主義社会では人間は道具化、奴隷化される⁽²⁹⁾と考え、フーリエ主義の労働観に傾倒した。

ブルック・ファームの多くの人々は社会主義社会が自由への鍵だと堅く信じていた。リブリーは自由と秩序は一致し得ると主張した。ブルック・ファームでは、多くの人々は自分の職業を選ぶと同時に、自分の指導者を選んだ。このリーダーは毎週選ばれた。人々が嫌って避ける仕事は道徳とボランティア精神に溢れる人々によって行なわれた。個人主義者が組織化主義に反対する時、完全な共同体とは、その共同体の常識による自発的秩序をもつ無政府社会のことだとリブリーは考えていた。

ブルック・ファームに参加した超絶主義者達は自由を「自分らしく生きる権利、個性の発展」と定義した。彼等は、すべての人々に自己発展の機会が保証される社会主義社会においてのみ実現が可能だと信じていた。リブリーの「個人と共同体の問題」解決はブルック・ファーム会員の支持を得た。会員達のほとんどは彼のイデオロギーを受け入れはしたが、実際生活においては超絶主義者とフリーエ主義者との間には精神的闘争があった。労働者の一部は教養人を貴族政治的人間だと罵った。1844年—45年には学校増設に関して激論がくり返されたりした。しかし、全体的には、ブルック・ファームはなんとか意見を一致させて運転された。表面的には、両イデオロギーを調和させようとしたリブリーは成功した。しかし、ブルック・ファーム運動が超絶主義とフリーエ主義を和解させることは不可能なことであった。個人主義者エマスンは初めからブルック・ファーム運動を無視した。無視するということは、時には強い反抗である。

IV 奴隷制度廃止とエマスン

青年エマスンは、日記に「奴隷制の幻想」(Vision of Slavery)と題して3⁽²⁹⁾度も書いている。6日には黒人奴隷の苦痛から想像される見えない神意があるのではないかと懐疑的に書いた。8日には人間の差別を認め、牛馬を引用して奴隷制について考えた。14日には奴隷を所有する農場主などの主張をそれなりに認めても、私利私欲のための奴隷制賛成論には反対するという意見を書いた。しかし、奴隷制度に言葉では反対してもエマスンは実際行動を全く起こさ

なかった。叔母ムーディ (Mary Moody Emerson) に「哀れな奴隷は鞭打たれ、道徳を知らず、神と人とを呪いながら死んでゆく。鎖につながれた奴隷はどうなるのだろうか」という質問状を送った。⁽³⁰⁾ 変人ムーディは1830—40年代には奴隷制反対運動の闘士であった。他方、叔母リプレー (Sarah Alden Ripley) には寛大すぎないようにと書き、人間は時と運命に左右される奴隷だとソーロウの考えに似たことを言った。

1827年以後の日記には奴隷に関する記述が時々見られる。西印度の農場主の話⁽³¹⁾を聞いたエマスの奴隷解放に関する意見も見られる。同じ頃、黒人奴隷を国外移住させたらどうかという話題について書き、これについては、火山の消火計画のようだという新聞批評もあったと日記に書いている。また、改革運動家を弁護して、周囲の連中が改革は余計な親切だと嘲笑したら、笑うやつらは奴隷のない社会を考えられない罪人で、奴隷制を考えているのは改革運動家だけだと書いている。⁽³²⁾ エマスの日記全体を通して多く論及されているのはニューイングランド出身の政治家ウェブスター (Daniel Webster) である。1830年代には彼の演説に対する賞賛が日記の至るところに散見される。

人間は理性に従って生きるところに民主主義や自由の根源があり、これが奴隷制を許さないの、人は自分を尊敬して自分に忠実でなければならないと日記 (1834. 12. 9.) に書いている。「私の意見は価値がなくても、農場主の利益のために発言するようなことは絶対にしない。奴隷制反対によって社会が破壊するという反論があるなら、奴隷制をもつ国に生きたいとは思わない。……夢のなかでも気が狂っても一言でも奴隷商人や奴隷所有者のために弁解するような恥はさらしたくない」と書いた。⁽³³⁾ エマスは奴隷制度には反対したが、自己顕示欲に駆られる奴隷制廃止論者を非難した。その頃、エマスが日記に奴隷制に関して書いているのは北部地方で奴隷廃止論者に対する暴行とか、南カロライナ州で機関誌停止などがあったり、父ウィリアム、弟チャールズ、妻リディア、叔母ムーディなど廃止論者がエマスの周囲にいたからである。

コンコードの第二教会集会室で、求められた講演「奴隷制」 (Slavery) (1837. 11.) をエマスは行なった。このなかで、「町や近所の人々や自分の罪惡を忘れてジョージアやヴァージニアの狂暴に対する非難や奴隷への同情

を誇張しないようにしよう。……農場主非難をやめよう。彼の不幸は罪と同じく大きいものだから」と言った。エマスのこの意見には奴隷制廃止論者の批判が集中した。エマスが博愛運動に参加しなかったのは、自分に対しては絶対的基準を求めてもいいが、他人に対しては外部条件によって個人の責任を追求しないことが重要だと考えたからである。エマスは農場主も非難したが、奴隷も自分を奴隷にしたという点で非難した。しかし、黒人は白人より低次元で創られ、模倣的、第二次的で道徳的分野では黒人とは友人になれないとエマスは言って保守的ボストンを弁護したようでもある。奴隷問題を身近かな問題として考えると、強力な政治家の出現を期待すると、奴隷制廃止論者の努力を批判すると、農場主に理解を示すと、奴隷自身の責任を追及するとかいうところにエマス独自の矛盾した意見を見せたようである。奴隷制廃止論の盛んなコンコードでの講演「奴隷制」は多くの聴衆を失望させた。1830年代にはコンコードを訪ねた奴隷制廃止論者は多く、エマスも3人に1人が奴隷制廃止の講演をすることを認めていた。また、エマスも参加していた図書館委員会は奴隷制問題に関する書物を多数集めていた。それにもかかわらずエマスは奴隷制廃止論者に同調しなかった。しかし、当初からの奴隷制反対婦人協議会員であったリディアと再婚（1835. 9. 13.）している。エマスの奴隷制問題の中心は言論の自由の問題のようである。1837年11月7日夜にイリノイで狙撃されて死んだ奴隷制反対の有名な記者ラブジョイ（Elijah Parish Lovejoy）のことをエマスは「心の正しい人は奴隷制廃止の決心をしなければならぬ」と書いた。⁽³⁴⁾ 奴隷制廃止運動は北部諸州の良心を目覚めさせ、それによって南部諸州の良心を目覚めさせるというのがエマスの意見であった。

やがて、エマスの否定的なウェプスター観が日記に散見される。⁽³⁵⁾ 遂に「ウェプスターには原理への愛着に対する敬意がない」と日記で決めつけた。⁽³⁶⁾ 「改革者としての人間」（“Man the Reformer”）をボストンで講演（1841. 7.）して、「人間の目標は人間が作ったものの改革者になることである。……自然こそ過去の追憶のうちに眠らずに毎時力を回復し、毎時新生命に脈動しつつ新生命をもたらしてくれる模範である」とエマスは説き、改革者に一層の努力を期待し、我々も熱意を示すべきだと結んだ。しかし、この講演は全体的に見

ると急進的奴隸制廃止論者を批判し、多数の人々がこの制度改革の必要を認める時にその弊害が自然に除かれるだろうと言って多数派の目覚めを期待している。ボストンでの講演「時代について」(“Lecture on the Times”, 1841.

12.) も同様の意見を述べている。改革主義者は外面的に恐怖や激昂を煽り人間愛や原理を忘れていてと彼等を批判して、人間は手段に頼らずに真理の生活をして非活動に同調すべきだと言っている。エマソン自身が非活動で、時代展望は明るい信じ、道徳精神を守ればいいと説いている。この講演のなかでは、「博愛主義者という連中こそ言葉や表情に至るまで奴隸保有者なのだ。彼等こそ残忍な奴隸法を携えて、西北部辺境をうろついているジョージアやアラバマのようなものだ。……奴隸制廃止論者が奴隸の環境だけを問題にする時、彼等の闘争は実につまらないものだ。奴隸の宗教感情を少しでも高めれば、もはや奴隸ではなく、廃止論者こそが奴隸になるのだ」と非難して奴隸制廃止運動を嘲笑した。

続いてエマソンはボストンで「若いアメリカ人」(“The Young American”, 1844. 2. 7.) を講演して、アメリカの独立性と輝かしい未来像をヨーロッパを意識しながら語った。直接に奴隸制度のことにはふれず、自由貿易が封建制度を破り、アメリカの平和を築き、将来、奴隸制度を廃止させるだろうと言うにとどまり、奴隸制廃止論者や博愛主義者を妨害するのはよそうと結論づけた。間もなく講演「ニューイングランドの改革者達」(“New England Reformers”, 1844. 3. 3.) では、この25年ほどの抗議を取り上げ、改革運動家の組織依頼心を批判して1人の偉人の強さには彼等はかなわないと述べた。法律の権威と正義の美德を対照してエマソン自身の正義の立場を示し、天分に従って自由な活動をする時には天使が現われて牢獄からつれ出してくれるのだと楽天的な態度で、騒ぎ廻る奴隸制廃止論者を批判した。たとえば、ソーロウの納税拒否行動のようなものにはエマソンは反対であった。エマソンはコンコードで講演「イギリス領西印度諸島における黒人解放記念講演」(“Address on the Anniversary of Emancipation of Negroes in the British West Indies”, 1844. 8. 1.) を奴隸解放10周年記念のために行なった。これは奴隸制に関するエマソンの講演中で最も長いものである。奴隸の歴史的過程について1834年8月

1日の完全廃止までを述べて、廃止時に奴隷所有者に補償したことで、黒人の平静な態度、イギリスの利益と正義の結合を賞賛した。アメリカの黒人奴隷の現状を批判し、南部諸州の議会の怠慢を責めると同時にイギリスの態度を評価して、アメリカもこれを見習うべきだと言った。人類には白人とか黒人とかいう区別はないという天の意志を示した8月1日は記念日だと結んだ。エマソンはイギリスの奴隷解放を道徳革命だと高く評価し、アメリカの廃止運動は熱狂的な変質者の危険な行動だと不信感を示した。しかし、服従拒否論としてはエマソンの他の奴隷解放講演同様に迫力に乏しい。

1850年代は奴隷制問題が緊迫した時代で、南北妥協による「逃亡奴隷法」(“Fugitive Slave Law” 1850. 9. 20.)改悪や、「カンザス・ネブラスカ法」(the Kansas-Nebraska Bill, 1854. 5. 30.)制定があり、それに伴う闘争から遂に南北戦争が勃発した。エマソンは「逃亡奴隷法」改悪には、法律反対を感じたことのない自分だが、今では不名誉が広がって息苦しいとして「逃亡奴隷法」批判の講演(“Fugitive Slave Law”, 1851)を行なった。この法律改悪はウェブスターによる南北妥協のもとに逃亡奴隷逮捕協力によって北部自由州を奴隷制に協力させようとするものであった。従来は改革について語らなかったエマソンであったが、自由を束縛されたことに対する義務感として講演した。そして、道徳的に正しい人々が中心になり、奴隷州への不干渉、自由州の奴隷州化不許可の原則による「逃亡奴隷法」の無効、廃止、服従拒否というようにエマソンは論調を高めた。彼は日記に「神に誓ってこの法律には従わな⁽³⁷⁾い」と書いたりしているが、楽天的態度は失われたとしても、書斎や講演会場で道徳的改革に頼るという態度を変えないで、決意を具体化する行動に出ることはなかった。ここでもソーロウの「市民の反抗」(“Civil Disobedience”)の態度と比較できるであろう。また、エマソンは同じ題名の「逃亡奴隷法」という講演(1854)の内容は異なるが行っている。この年にカンザス・ネブラスカ問題が起こった。エマソンはこの問題の責任者ウェブスターを批判した。この講演で、反道徳的法律は無効だと主張し、この問題には自分の分別と精神だけを頼むと決心した個人だけが対抗できると語った。正義の実行と不屈の意志こそ自然法の力を得て勝利に至ると考えるエマソンは世界の基盤である自然法に反

する奴隷制の没落は必至で、個人が美德と教育によって他地方の住民と協調することを期待した。従来ほど楽天的ではないが、奴隷制反対協会を尊敬すると言っても具体的なことは説いていない。「逃亡奴隷法」への怒りに満ちたこの講演もやはり抽象的である。また、ボストンにおける逃亡奴隷バーンズ(Burns)の送還の判決(1854. 5.)は民衆による裁判長非難や阻止運動などがあって大問題になり、ソーロウの反抗は一層強烈になったが、エマソンは依然として自然法を信頼し、民衆連帯の正義の実行には不屈の支援を述べるだけで、具体的にバーンズ問題に対処することはなかった。

エマソンはさらに、「奴隷制」という講演(“Slavery”, 1855)を行なって服従拒否について少しふれた。しかし、具体的なことには何も発表せず、2, 3の間接的な服従拒否の言葉を述べるにとどまった。有名人エマソンは「サムナー上院議員襲撃事件」についての講演(“The Assault upon Mr. Sumner”, 1856. 5. 26.)では非政治的方法に賛成し、「カンザス救済会議」の講演(“Speech at the Kansas Relief Meeting in Cambridge”, 1856. 9. 10.)では統治消滅論、大衆の自主的集団を評価したが、これも服従拒否とは直接の関係はない。さらに、ボストンで「ブラウン」という講演(“John Brown”, 1859. 11. 18.)を行なったが、自由保護の法律を見落しているらしい裁判官にふれてはいるが、その法律について具体的なことは言っていない。このように、1850年代には服従拒否に対するエマソンの期待は弱まり発言も激減している。

強力な政治家の出現を待ったエマソンの期待に応えたのがリンカーン大統領の登場(1860. 11. 15.)であった。南部連邦結成(1861. 2.)やサムター要塞砲撃(1861. 4.)という不幸にもかかわらず、リンカーンの強い指導力と南北戦争勝利をエマソンは期待した。書翰による⁽³⁸⁾エマソンは長期間の耐乏も覚悟し、あくまでもリンカーンを信頼した。そして、遂には、リンカーン追悼講演もエマソンは行なった。

超絶主義者の運動はサムター要塞陥落前に終わったようだが、多くの超絶主義者は1861年にも各自の活動を続けた。彼等は唯心論を信じて、講演や説教で、人間の神性、潜在能力を教え、未来の輝かしい社会の出現を説いてきた。彼等の多くは合理主義に流されず、罪の許しのために血を流すという原始思想に復

帰した。彼等にとって南北戦争は神学的、道徳的なものであった。自由意志は以前ほど重要ではなくなった。超絶主義者は、他宗派の人々と同じく理想郷建設を信じてはいなかった。会衆派の牧師チーバー (George B. Cheever) は奴隷制廃止論者であるが、南北戦争勃発直前に『奴隷制度の罪』 (*The Guilt of Slavery*) を出版し、国民の罪を警告し、南北戦争は神の決定であると説いた。神意と罪と救いの強調は正統派の人々のみならず超絶主義者達の信じるところでもあった。ただ超絶主義者は償いと犠牲をより強調した。超絶主義者の多くが保守的であったのでエマソンは比較すれば遙かに進歩的であった。しばしば引用される超絶主義者のなかの代表的保守主義者は、キング (Thomas Starr King)、クラーク (James Freeman Clarke)、チャニング (William Henry Channing)、バートル (Cyrus Bartol) の4人である。戦時中、彼等はユニテリアン派の牧師であった。彼等のなかでキングだけが西部カリフォルニアにいたが、南北戦争を試練、最後の審判の日と呼んだのは他の東部在住者と同じである。チャニングだけが自分の信念を卒直に述べたが、彼も戦争は清めのための救いの神意だと説くところは会衆派チーバーと同じである。彼等は表現に多少の相違があっても、結局は、5人共同じだと言うことができる。さらに、代表的超絶主義者を選ぶならば、コンウェイ (Moncure Conway)、ジョンソン (Samuel Johnson)、ワッソン (David A. Wasson) であろう。これらの人々はエマソン同様にリンカーン⁽³⁹⁾の死まで大政治家を見出だすことはできなかった。エマソンだけは正統派へ復帰することがなく、超絶主義者に期待された修辞法で南北戦争を解釈した。つまり、エマソンは自分を道徳的に正さなければならず、誰も救ってくれることは出来ないと言った。他の牧師達が宗教的救済を説いていた時にエマソンだけは道徳的勝利を語っていた。他の牧師達が南北戦争を救済のための戦争と呼んだ時にエマソンだけが人間性のための戦争だと言った。多くの牧師は南北戦争を審判の日として捕えた。多くの超絶主義者は宗教的国家主義者であった。人間は多重人格者だと古今の世界史は教えている。エマソンは、時には講演と彼の心中とは異った考えを持ち、稀には裏切り者とさえ呼ばれたこともあった。

しかし、エマソンは愚かな反抗精神は持たなかったが、幼少時代からの環境

の影響があつて多少の反抗精神は持っていたに違いない。カリスマ性に乏しかったエマソンは、反抗精神の持主であつたとしても、それを具体化するだけの実践的能力を持っていなかった。

注

Text: *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*. Ed. Edward W. Emerson. 12 vols. (Centenary Edition) Houghton Mifflin, 1903—04, rpt. AMS Press, 1968. Vol. 1 “An Address.”

- (1) Journal, Jury, 1865.
- (2) J. November, 1865.
- (3) “An Address,” p. 122.
- (4) Ibid., p. 144.
- (5) Ibid., pp. 57—62. (Journal, April 18, 1824)
- (6) Ibid., p. 83.
- (7) Ibid., pp. 89—90. (J., June 20, 1831)
- (8) Ibid., p. 92. (J., January 10, 1832)
- (9) Ibid., (J., January 30, 1832), Ibid., p. 94. (J., June 2, 1832)
- (10) Ibid., pp. 94—100.
- (11) “The Lord’s Supper”
- (12) J., February 17, 1838.
- (13) J., October 16, 1837.
- (14) March 5, 1838.
- (15) March 18, 1838.
- (16) April 1, 1838.
- (17) Boller, Paul F. Jr., *American Transcendentalism, 1830—1860*, G. P. Putnam’s Sons, Capricorn Books, N. Y., 1974, pp. 1—3.
- (18) J., June 13, 1838.
- (19) J., September 29, 1838.
- (20) October 12, 1838.
- (21) Slater, Joseph, ed., *The Correspondence of Emerson and Carlyle* (Concord, October 17, 1838), Columbia Univ. Press, N. Y., 1964, pp. 196—197.
- (22) J., September 14, 1839.
- (23) September 18, 1839.
- (24) J., July 11, 1833.
- (25) J., April 6, 1842.
- (26) Bishop, Jonathan, *Emerson on the Soul*, Harvard Univ. Press, Cambridge,

Massachusetts, 1964, p. 87.

- ②7 J., June, undated, 1842.
- ②8 James Kay Jr., President of Philadelphia Fouriest Society.
- ②9 J., November 6, 8, 14, 1822.
- ③0 October 16, 1823.
- ③1 J., February 15, 1827.
- ③2 J., November 10, 1830.
- ③3 J., February 2, 1835.
- ③4 J., November 8, 1837.
- ③5 J., May 26, 1839, July 12, 1842, etc.
- ③6 J., April 14, 1844.
- ③7 J., June, 1851.
- ③8 January, 1862.
- ③9 April 14, 1865.